要　旨

中国では 1949 年の建国以来、30 年ほどの計画経済体制を経験したが、それ以降の市場経済が導入されてすでに 40 年近く経っている。経済体制からはじめ、政策構造、人々の価値観に大きな変化が見られた。そして、国、家族、個人の関係も変化しつつある。中国の家族変動については、国の政策が大きく影響していることが特徴的である。計画経済期の「単位」社会から改革開放政策以降の社区建設へ、また一人っ子政策の実施と終焉、これらの政策の転向は人々の家族構成、世代間関係、家族アイデンティティに影響を与えることは言うまでもない。

そこで本研究では一人っ子政策および改革開放の二つの政策の下で生まれ、育てられ、「小皇帝」と名付けられた「80 後」（バーリンホウ世代）の生殖家族を研究対象にする。子どもを持ち、大人になった「小皇帝」の生殖家族の以前の世代との異同を考察し、社会主義的近代および圧縮近代を経験する中国の家族変動の現在に着目する。80 後家族の比較対象として、70 後家族の分析も行い、彼らの仕事、家事と育児の現状、抱えている葛藤、行われた調整を中国現代社会のひとつの縮図として提示することとした。80 後の特徴と社会問題を踏まえ、本研究では以下の目的を設定した。

本研究の目的：

80 後の特徴と社会問題を踏まえ、本研究では、子どもを持つ 80 後が保守的及びリベラルな性別役割分業の価値観の間で、どのようなライフスタイルを選択するのかと、そのプロセスに注目する。具体的には、80 後がどのように稼得役割と家事・育児役割の意味づけをし、遂行するのかということ、そして、遂行の際に生じる葛藤と、その正当化のプロセスを明らかにする。最後に、「親への移行」というライフイベントを経験する際における、稼得役割と家事・育児役割の遂行のプロセスに注目し、70 後と比較しながら分析を行うことで、80 後ライフスタイル選択過程の独自性を可視化させ、特徴を明らかにする。

先行研究では、中国全体の家族を対象に、家族変動を一括でとらえる研究が主であるが、そこでは、中国の家族が多様で、変動的であることが明らかにされている。経済市場化が進む現在の中国では、国が提唱する「男女同じ」の規範、集団主義の拘束力が弱まり、個人化が進む様相が見られている。一方、本研究では、世代別に、核家族の成員である男性と女性の相互作用、男女平等のジェンダー規範、集団主義を提唱する社会の変化に注目しながら分析を行うという点で、新規性がある。80 後と 70 後家族の比較を通して、中国家族変動の傾向の提示を試みた。また、中国の家族研究では男性への注目が欠如しがちである。そこで、本研究では、妻と夫の相互作用における役割遂行の文脈の中で議論を展開した。

本論文は序章と六章の本論で構成されている。第一章では中国の家族を議論するための家族変動、世代間関係、ジェンダー規範の変遷の歴史を整理した。第二章では、80 後と 70

後の由来と中国の改革開放の社会構造の変化を提示し、80 後研究、仕事と家事・育児の問題に関する研究を取り上げた。そして、80 後の家族と中国の家族変動に関する研究を述べ、本研究における 80 後研究と中国の家族変動研究の位置付けを明確にした。第三章では、調査データに関する説明をし、本件研究の調査地である山東省と調査対象者の特徴を述べた。第四章と第五章の実証部分では、半構造化インタビューを通して得られた語りデータの分析結果を展開した。そこで、80 後男性と女性の役割遂行やその意味づけだけではなく、夫婦の互いに対する評価も取り入れ、夫婦間の相互作用を見出した。また、70 後との比較を行い、80 後のライフスタイル選択過程で見られたジェンダー規範と 80 後家族の特徴を明らかにした。結論の第六章では、研究結果を総括的に述べた後に、本研究の問題関心に沿って 80 後研究、中国の家族変動への示唆と残された課題を提示した。

本研究の結果として次のような知見が得られた。70 後と比べ、80 後のほうがよりジェンダー意識がリベラルであるにもかかわらず、稼得役割と家事・育児役割の遂行において、70 後よりも保守的なジェンダー規範の性別分業に従っている傾向が見られた。そして、役割遂行において、70 後よりも 80 後のほうの葛藤が大きい。また、80 後の役割遂行は個人の戦略的な性格をもつため、80 後のジェンダー意識が保守化したと評価をすることは尚早であろう。さらに、80 後は個人として家族と関わり、家族の有限性を了承し、80 後家族には 70 後より脱近代的な様相が多くなった。よって、80 後ないしそれ以降の 90 後、00 後家族は先進国に見られたかつての標準的な近代家族化はしない可能性が示唆された。